

上野誠氏『万葉集講義』を読む — 中国古典文学研究の立場から —

Decoding the “Manyōshū Kougi” by Makoto Ueno: A Viewpoint from the study of Classical Chinese Literature.

住 谷 孝 之

SUMITANI Takayuki

キーワード：万葉集、中国文学、漢詩文、文選、玉台新詠、詩品

上野誠氏の新著『万葉集講義 最古の歌集の素顔』（中公新書、二〇二〇年）は、新元号「令和」の典拠として『万葉集』への注目が著しく集まっている昨今の情況下、新たに登場した万葉入門書である。発売後には、朝日・読売・毎日等の各新聞でも書評や著者インタビューが掲載されるなど、高い評判を呼んでいる。とは言え、本書の内容は、現在の万葉ブームに便乗しただけの安易なものでは決してない。近時の万葉研究の成果をふまえ、「東アジアの漢字文化圏の文学」「宮廷の文学」「律令官人の文学」「京と地方をつなぐ文学」という四つの要素から、従来の『万葉集』にまつわる「天皇から庶民まで幅広い階層が詠んだ」「日本的な国民文学」という誤解されたイメージをうち崩そうと試みる、一般読者向けの書としてはなかなか刺激的な内容が、著者の平易で親しみやすい文章で語られることで、専門外の人でも面白

く読ませるものとなっている。

中国古典文学を研究する筆者の立場としては、とりわけ『万葉集』を「東アジアの漢字文化圏の文学」と位置づけ、当時のグローバル化の同調重圧（中国文化）とそれに対抗するローカル化の同調重圧（日本文化）のせめぎ合いから生み出されたとする著者の主張には大変興味を惹かれた。また日本の歴史上、『万葉集』への関心が高まる時には、その日本的側面にはかり脚光が集まる傾向を批判し、もう一つの淵源である、『文選』をはじめとする中国文学の方面にも目を向けなければならないという意見にも大いに共感した。

しかしながら、本書における中国古典文学（漢詩文）に関わる細部の記述については、若干の気になる箇所が散見した。以下に粗略ながら、筆者が一読して気になった七箇所（傍線部に示す）を指摘することに

したい。

①一七頁・中国において、詩が個人の心情を表現するものになっていったのは、いわゆる建安七子（魏の曹操のもとに集まった七人の文学者）以後のことである。これは、中国社会において、漢字の定着もたらした現象ということになる。この文字の普及が、広い地域の人びとを束ねる国家を生み出し、歴史を誕生させ、歌を個人の心情を表現するものに変えたのである。

中国における「漢字の定着」は建安七子の時代（後漢末～三国時代の二～三世紀）より遙かに前のことである。それを示す根拠はいろいろ挙げられるだろうが、これ以前の時代に、文人の文学としてすでに辞賦が存在していることを指摘するだけで十分だろう。この部分を正しく書くとすれば、「これは、詩（漢詩）が文人の正式な表現手段と認識され、その文学的地位が向上したことによる。これ以後、中国の文人は出来上がった詩に自ら署名し、作者として名乗りを上げるようになったのである」とでもなろうか。

②一九七～一九八頁：『新撰万葉集』上巻序の上野氏による以下の訳について。

まず、最初に言っておきたいことは、『万葉集』は、古歌の流れを汲むものであるということである。牛馬を動かす鞭のように

人の心を動かす天下の名詩として、いまだかつて『万葉集』ほど称賛されたものはない。いわんや、かの中国において、新しき流行歌としてはやされた鄭国や衛国の歌のようなものは、『万葉集』より見れば、もの数に入らないといえよう——。

上野氏が参照したという『新撰万葉集注釈（一）』（和泉書院、二〇〇五年）の「新撰万葉集序注釈」によれば、原文は次の通り。

夫万葉集者古歌之流也。非未嘗称警策之名焉。况復不屑鄭衛之音乎。

「非未嘗」は、これと完全に一致する類例を見いたしたがたい表現だが、「未嘗不」（未だ嘗て～せずんばならず）と類義の「これまで～しないことはなかった」と解し、「未だ嘗て～せざるに非ず」と訓読したい。

「警策之名」について、「警策」は「（馬に策さしをあてて勢いづけるように）一篇の詩文全体を引き立たせる秀句」の意。転じてここでは「詩文の傑作」の意（興膳宏『中国詩文選10 潘岳 陸機』筑摩書房、一九七三年、二三一～二三二頁。同『中国文明選13 文学論集』朝日新聞社、一九七三年、五五頁。福井佳夫『六朝文評価の研究』汲古書院、二〇一七年、六〇頁を参照）。従って「警策之名」は、ここでは「すぐれた傑作の名声」とでも解すべき。

「鄭衛之音」について、「新撰万葉集序注釈」は「古歌」に対して「新

しい流行の歌」と解釈し、上野氏もそれに従っているが、個人的には一般的な「卑俗な曲」「淫らな歌」の意味で解釈するのが適切に思う。「古い歌×新しい歌」ではなく、「古雅で高尚な歌×卑俗な歌」の対比の文脈で読むべきだろう。

以上から、右の文章を現代日本語訳するならば、「そもそも『万葉集』とは高尚な古歌の流れをくむものである。これまですぐれた傑作としての名声を称賛されなかったことはなかった（常に称賛され続けてきた）。ましてや鄭衛の国の歌のごとき卑俗な歌などは、なおさらかえりみるまでもない」とでもすべきだろう。

③ 二一四―二一五頁の第六章のまとめ④…『万葉集』の名義には諸説あるが、当時の語義としては、「万葉」は、永久、永代、永世の意味と考えざるを得ない。しかし、「葉」はもともと「木の葉」を表すものであるから、木々が茂り、たくさん葉があることも連想されるので、たくさん葉の歌という意味も含意されているはずである。この考え方は、松浦友久説を踏襲するものであるが、私説と松浦説が異なるのは、祝福性があると考える点である。

本書が述べるとおり、松浦友久氏の説は『万葉集』という名の双関語―日中詩学ノート（大修館書店、一九九五年）によるものだが、実は松浦氏の著書に対して、辰巳正明氏が書評（『国文学研究』第一一八集、一九九六年より）で上野氏と同様の主張をしており、それに対する松浦氏の反論がすでに存在している（『中国古典詩学への道 松浦

上野誠氏『万葉集講義』を読む（住谷孝之）

友久著作選Ⅳ』研文出版、二〇〇五年より『万葉集』という名の双関語（再論）」。松浦氏は、辰巳氏への反論の中で、「万葉」という語自体に「祝意」を持つという主張がなぜ不適切であるか、三つのポイントを指摘しているが、恐らく最も重要なのは次の第三のポイントだろう。

……上記のごとく、「万葉」は永久・長久を表す雅語・美称ではあるが、「万歳・万寿」などのように、それ自体で祝意・賀意を表すことのできる言葉、ではない。……例えば、辰巳書評が象徴的な用例として引く「祀事孔明、祚流万葉」は、「神への祭祀が立派に行われることによって、神の下す祚（福祉）は万葉に流れる」の意であり、「万葉」自体は雅語・美称として使われているだけである。この両句の祝意・賀意は「祀事」と「祚流」によって担当されていることが、分析的に知られよう。（一八五頁）

上野氏が二〇七―二二二頁で論拠としてあげている『梁書』武帝紀上および『日本書紀』顕宗天皇即位前紀条の「永隆万葉」（永く万葉に隆にす）や『日本後紀』延暦十六年条の「庶飛英騰茂、与二儀而垂風、彰善瘴惡、伝万葉而作鑑」（庶はくは英を飛ばし茂を騰げ、二儀と与にして風を垂れ、善を彰かにし悪を瘴み、万葉に伝へて鑑と作さんことを）なども、上述の松浦氏の分析に従えば、「祝意・賀意は「永隆」（永く隆にす）と「庶」（こいねがあ）の語に担当されており、「万葉」の語自体にそうした意味はない」ということになろう。

さらに『日本後紀』の例では、「庶」に続く「飛英騰茂、与二儀、而垂風、彰善癉惡、伝万葉、而作鑑」が对句であることも、「万葉」の語自体にそうした意味はないことの論拠としてあげられよう。仮にここで「万葉」が「祝意・賀意」を表すならば、この文において対偶関係にある「二儀」（ここでは「万葉」万代）に対する「天地」天下の意か）もまた同様の意味を表すと考えなければならなくなるからである。このように中国語の文章における構造上の特質からも、この用例に祝福性があると解釈するのは無理がある。

実はこの点についても、同様の指摘が松浦氏によってすでになされている。

……特に薛道衡の「流沢万葉」は、「用数百年」との対語であることによつて、——「百年」自体が祝詞・賀詞でないのと同様——たんに雅語・美称として「長久」の意に用いられていることがよく分かる。この二句が祝詞の章句でありうるのは、それが「頌」の一部であることと、「流沢」の「恩」沢の字義とに因つているのであり、「万葉」に因つていのではない。（一八六頁）

以上の通り、本書で上野氏が主張する「万葉」祝意」説およびその論拠について、松浦氏は反論済みであるといつてよい。上野氏は松浦氏の反論を参照したのであろうか（本書を読む限りではその形跡はうかがえない）。仮に参照していても「万葉」祝意」説を主張するというのであれば、松浦氏のこの反論を前提に自説を展開すべきだっ

たろう。

④ 二一八頁…中国においては、書物を、儒教經典にあたる「経部」、史書に相当する「史部」、諸子百家の思想書にあたる「子部」、今日、文学に分類される「集部」に四分類する。「文選」は、現存する「集部」のなかでは、最古の「集」ということになる。

この記述では、「集部」の『楚辞』や『別集』が無視されることになつてしまふ（『隋書』経籍志などを参照）。川合康三ほか『文選 詩篇（一）』（岩波文庫、二〇一八年）の解説は以下の通り。

中国の書物は伝統的に「経部」「史部」「子部」「集部」の四つに分類される。……集部は「別集」と「総集」に大別される。「別集」が個人別の文集であるのに対して、複数の作者の作品を収めた文集は「総集」と呼ばれる。そして『文選』は今日まで伝えられたなかでは最も早く編まれた総集であり、かつ歴代の総集のなかで最も重要なものとみなされてきた。（三七三頁）

上野氏は恐らくこの文章を参照したのだろうが、『文選』は現存最古の「総集」とあるのを落としてしまったために不正確な記述になっている。

⑤ 二二〇頁…これは、『文選』第二十九卷「雜詩」の張茂先「情詩」

を重ね絵の下敷きにするものである。

張茂先とは、西晋の文学者、張華（茂先は字）のこと。『文選』では、作者名を通常「姓+字」で表記する（例外あり）ので、それに従ったのだから、本書で他の人名は「姓+名」の表記なのに、ここだけそうなっていないのは奇異に感じる。すぐ後の記述に「同じ詩は『玉台新詠』巻二にも採られており、明らかに額田王の歌は、『文選』『玉台新詠』に学ぶものである」（二二二頁）とあるが、『玉台新詠』は作者名を「張華」と表記しているの、それに従うべきだったろう。ちなみに上野氏が参照されたという『文選（詩騷篇）四（全釈漢文大系）』（集英社、一九七四年）の本詩の題解には、『玉台新詠』巻二には、張華の名で、五首が載せられている（三一八頁）とある。あるいはこの記述から「張華」を「張茂先」の別名（または『玉台新詠』では「張華」という別人の作扱いしている）とでも思い違いましたか？

⑥二二四～二二五頁：川合康三は、『文選』の文学理論が、『文心雕龍』（劉勰著）に基づくものであると指摘している。……一方、恋情をつづる艶詩を集めた『玉台新詠』（徐陵撰）も、万葉ひとに大きな影響を与えた書物であったが、こちらは『詩品』（鍾嶸著）という理論書の影響を受けているという。

④でも言及した、岩波文庫『文選 詩篇（一）』の「解説」によれば、川合氏は『文心雕龍』と『文選』の関係性の対比で『詩品』と『玉台

上野誠氏『万葉集講義』を読む（住谷孝之）

新詠』を取りあげ、「四書が互いに対照的であるのは、あるいはそれぞれの撰述において他者を意識したことを反映しているかも知れない」（二三八〇～二三八一頁）とは述べているが、『詩品』と『玉台新詠』が影響関係にあるとまでは断言していない。

『詩品』と『玉台新詠』がどこまで影響関係にあるかについては、中国文学の研究者の間でも見解は一致していない。確かに森野繁夫氏のように、鍾嶸は、『玉台新詠』の編纂を徐陵に命じたこととされる梁の簡文帝蕭綱が晋安王だった時代に記室（参軍）となったことから、簡文帝の「性情の吟詠」を重視する文章観に大きな影響を与えたと推測する向きもある（『六朝詩の研究』第一出版社、一九七六年、八五頁）。これに対し、林田愼之助氏のように、性情の吟詠を重視する点では両者は共通するものの、その内実と当面する文学をとらえる視点と評価では、「その内容において雲泥のひらきがある」「両者の認識は全く異なっていた」という見解もある（『中国中世文学評論史』創文社、一九七九年、三八八・四〇六頁）。さらには福井佳夫氏のように、そもそも『玉台新詠』に収められた宮体詩の創作は簡文帝らにとって裏側・戯れの文学であり、本気で打ち込んだものではなかったという意見もある（『六朝文評価の研究』三八六～三九七頁）。

実際、鍾嶸が高く評価するのは、漢魏の古詩や建安文学の詩であり、同時代である齊梁の永明体のような声律美・形式美を重視する詩風には厳しい批判を浴びせている（『詩品』序より）。一方の簡文帝は、自らの文章「与湘東王書」の中で「近世の謝朓・沈約の詩、任昉・陸倕の筆は、斯れ実に文章の冠冕にして述作の楷模なり」と謝朓・沈約ら

永明体の詩を理想的な文学として絶賛する。また、『玉台新詠』の主要作品を占める宮体詩は、『詩品』が批判する永明体の流れをくみ、声律美・形式美重視の側面を持つ詩風とされる（『梁書』庾肩吾伝より）。さらにこれを承けて、興膳宏氏は宮体詩の淵源に沈約の艶詩があるとする（『乱世を生きる詩人たち—六朝詩人論』研文出版、二〇〇一年より「艶詩の形成と沈約」）。

※ただし上述の福井論文では、こうした通説に疑問を呈していて、「永明体—簡文帝にとつての正統的な文学×宮体詩—裏側・戯れの文学」という位置づけである。

いずれにせよ、永明体に対する二人の評価にこのような大きな懸隔が存在する以上、『詩品』と『玉台新詠』に影響関係があると述べてしまふのは問題があるう。

⑦二二六頁…ちなみに、新しい元号となった「令和」も梅花宴序に由来する。けれども、さらにその淵源は、王羲之（三〇三～三六二）の「蘭亭の序」と、「帰田賦」（『文選』巻十五の「志」に収載）にある。

「令和」の由来については上野氏の指摘通りであるが、「梅花宴序」（梅花歌序）という作品自体については、王羲之の「蘭亭序」のほかに、王勃などの初唐文人の詩序もモデルにしていることが、興膳宏「遊宴

詩序の演変—「蘭亭序」から「梅花歌序」まで—」（『國學院中国学会報』第五三輯、二〇〇七年）で指摘されている。上野氏の『万葉びとの宴』（講談社現代新書、二〇一四年）五一頁および「参考文献」にはそのことが言及されている上、他の関連書籍では必ずしも指摘されていることではないので、折角だから本書でも一言触れておいてもよかつたのではなからうか。なお王羲之の文才については、福井佳夫『六朝書翰文の研究』（汲古書院、二〇二〇年）を、王勃ら初唐文人の詩序については、道坂昭廣『王勃集』と王勃文学研究』（研文出版、二〇一六年）をそれぞれ参照。

以上、些末ながら中国古典文学を研究する筆者の立場から、本書の記述に関する幾つかの問題点を指摘した。近年では本書以外にも、日本の古典文学を東アジアの文化圏（漢字文化圏）の中からとらえなおそうと試みる書籍が、筆者の簡見の限りでもいくつか刊行されており、日本文学研究側の中国文学への関心の高まりがうかがえる。こうした研究状況の下において、日本文学の研究側が、中国文学側の研究状況をより一層正確に参照してもらえらることを筆者は望んでいる。そのような理由から、今回、中国古典文学を研究する側として、『万葉集』研究に関連する若干の意見を述べることにした。